友好都市　武蔵野市行政視察

【視察日程】
平成27年4月5～6日

【視察研修先】
東京都武蔵野市

【参加議員】
新田勝見　瀧澤征幸
萩野幸弘　菊池美也
小林立栄

小雨の中での武蔵野まつり式典にて

◆武蔵野まつり

市民のふるさとづくりや友好都市との交流推進を目的として開催され、今回で23回目を数える。桜は既に8割ほど散り、当日は小雨模様のため予定していたパレードは中止となったが、特設ステージには、遠野市長と議長、関係市町村の議員が大勢登壇し、会場を盛り上げた。

友好都市歓迎昼食会では、武蔵野市の各友好都市の特産品（遠野は丸切り干し大根）を使用した特製メニューのお弁当が用意され、心遣いが嬉しかった。

友好都市の食材をふんだんに使用したお弁当

◆武蔵野市立「ひと・まち・情報　創造館武蔵野プレイス」

武蔵野市のまちづくり推進の一環として、図書館機能、生涯学習支援、市民活動支援、青少年活動支援の機能をもった複合施設である。生活、文化、芸術、自然、歴史、まちづくり、ボランティア活動、市民活動、生涯学習、福祉、教育といった横断的な活動や交流ネットワークの活性化が図られている。

所管は武蔵野市教育委員会生涯学習スポーツ課で、公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団が指定管理を受けて運営している。職員は約100名で、収支予算（ランニングコスト）は約5億円となっている。

地上4階、地下3階の施設で、当初計画では年間80万人の利用を見込んでいたが、住民のニーズを的確に分析し、明確なコンセプトを持ち、施設機能を充分に引き出した管理運営で、現在の利用実績は約164万人である。

武蔵野市には、自治会という組織がないため、それに代わる組織や団体が活発に活動しており、武蔵野市ならではの発想によって造られた施設である。

雨の中、大勢の人でにぎわった会場

ひと・まち・情報　創造館　武蔵野プレイス館内

空き家対策とリンゴによる6次産業化視察

【視察日程】
平成27年3月24日～25日

【視察研修先】
青森県弘前市
青森県・タムラファーム㈱

【参加議員】
多田勉　瀧澤征幸
新田勝見　萩野幸弘
安部重幸　多田誠一
菊池由紀夫
菊池美也
小林立栄

弘前市で空き家等の活用、適正管理について研修

◆「弘前市空き家等の活用、適正管理等に関する条例」について

人口減少と増える空き家は全国でも大きな課題である。

人口18万人の弘前市は、昨年12月「弘前市空き家等の活用、適正管理等に関する条例」を施行した。

全国の空き家率は13・5％で、このまま放置すると8年後には21％まで増加すると見込まれている。弘前市は平成10年は9・6％、20年は16・4％と全国を上回る増加率。市内は豪雪ということもあり、空き家での危険家屋の増加、防災、防犯、生活環境の保全の観点から条例化を進めてきたという。

この条例の特徴は、し、所有者、市民、関連団体、自治組織、市民団体の責務や役割を定め、相互に協力し、取組むことであり、空き家の発生予防、活用、適正管理、跡地の利活用である。

当市でも空き家対策にしっかり取組み、市民の安全と財産を守っていかなければならない。

◆リンゴによる6次産業化の取組

弘前市のタムラファーム㈱の田村氏は、青果卸会社を退社し、リンゴ園3haの購入から年々増園し、同時に加工と販売に取組み、26年度のリンゴ販売「12ha・16品種」、加工品販売「5種類・16品目」と、年間1億円を売り上げ、中でも紅玉を使って通年販売しているアップルパイは1千万円を売り上げる人気商品である。

「利益率の向上、リスクの回避には加工品の製造・販売は不可欠で、良質のリンゴを使い、高品質な加工品を作っていく」と話されていた。

和歌山県のスーパーと契約取引をするほか、個人客約千人に直販し、味の好み・希望の品種を聞き、顧客の要望に応え、併せて加工品を紹介したチラシを同封して相乗効果に繋げている。

「おいしいリンゴ作りは品質の高い加工品につながり、常に新商品を開発し消費者と常に向き合えるよう励みたい」と話されていた。

加工品に使われるリンゴの洗浄・選果作業